



馬耳東風

普段何気なく使っている言葉の語源とか、あるいはものの由来とかを知ると、実はその言葉やそのものの意味を良く理解しないで漫然と使っていたことを思い知らされるという経験をしたことはないだろうか。筆者の場合、その典型は、野球のストライクとボールであった。長い間なぜストライクとボールと言うのか疑問に思っていた。ストライクは何となく理解できるがボールは何故ボールなのか皆目見当がつかなかった。ある時、「ベースボールと日本野球」（佐山和夫著、中公新書）という本を読んで野球の歴史を知った。本書によると、野球は米国で誕生した当時は、打って得点を競うゲームで、そのためピッチャーは打ちやすい球を投げなければいけなかったそうである。そして打ちやすい球であるのにバッターが打たなかった場合、なぜ打たないのだ、「打て」ということでストライクと言うようになり、打てないようなボールの時は、「フェアなボールじゃないぞ」ということでアンフェアボールと言っていたが、転じて単にボールと言うようになったという。翻ってわが日本では、第二次世界大戦中、敵国の言葉ということで英語の使用が禁止された時、ストライクは「ヨシ」、ボールは「ダメ」と言ったそうである。「ストライク」、「アンフェアボール」が、打者の立場に立った言葉であるのに対して、「ヨシ」、「ダメ」は投手の立場に立った言葉である。米国の野球は攻撃、日本のそれは守りを主体としていることと符合していて興味深い。その昔、大リーグチームが来日したとき、大リーガー達のパワーもさることながら、次の塁をねらう積極果敢な走塁に圧倒され、また初球やノースリーからでも平気で打つ大リーグの野球に魅せられたものだが、野球は点取りゲームという成り立ち

を考えるとこれらは当たり前のことなのだと納得したのであった。来日したある大リーガーが帰国後、「海の向こうの日本にベースボールに似たゲームがあった。」と言ったそうであるが、彼からすれば、初球やノースリーからは打たないのが一般的な日本の野球は、ベースボールとは考えられなかったのであろう。この本を読んだとき、野球とは全く関係がないにもかかわらずふと思いつかんことがあった。

それは、食の安全への関心の高まりを背景に、宇宙食の100%の安全性を保証するために考え出されたシステムということで、わが国の食品メーカーが競ってHACCPの認証を取得しようとし始めた頃のことであった。認証を得たある会社の製品が黄色ブドウ球菌に汚染されていることが明らかになり、何のためのHACCP認証取得かと問題になった事件があった。同じ頃、別の会社の製品がO157に汚染されているとの検査結果がある県の衛生研究所から発表された。しかしこの会社は、自社の製品はHACCPシステムに則って製造されており、O157の汚染など絶対にあり得ないと強く主張したため、国の研究機関が調査に乗り出すことになった。その結果、検査時に使用した陽性対照からの汚染という検査ミスであることが明らかにされたのである。同じHACCPの認証を得た会社でありながら、一方はお粗末な病原菌汚染事件を起こし、一方は公的機関の検査ミスを明らかにするという両極端の結果になったので強く印象に残っている。自社製品の安全性を宣伝する道具として、形だけHACCPシステムを導入した会社と、まさに100%安全な製品を作るために導入した会社の差と言ってしまうまでもだが、筆者にとってはものの起源に深く思いを致す大切さを教えてくれた対照的な出来事であった。

(久)